



〒344-0001
埼玉県春日部市不動院野1112-1
TEL048-760-1200
FAX048-760-1201
https://www.kasukabe-saintnoah.jp



～目次～

- 病院短信 『食べることが生きること』 渡辺 弘子
- 日常の一コマ 小沢 のり子
- いきいき看護・介護 西田 正子
- 相談室だより 田中 ひとみ
- 誕生日会&敬老会 各病棟デイルーム

10月の予定

◇誕生日会

1病棟	10月 4日(月)	各病棟デイルーム 14:00～
2病棟	10月 4日(月)	
3病棟	10月12日(火)	



誕生日会&敬老会

ヨ～イ♡
スタート
(´ー´)ノ

うちわであおいでコップを飛ばせ～♡

そ～れ!
ぱたぱた!
(^0^)/

カラオケ大会♡
自慢の歌を披露(´▽`)

敬老会 & 誕生日会

審査員♡
満場一致で
○が出まし
た～(*^^)v

敬老の日

夏祭り花火上映会!!
臨場感たつぷりで、皆さん本物の花火を見ているようでした(*^^*)

た～まや～!!

チョコバナナやジュースなど飲みながらカラオケを楽しみました(*^^*)

『9月の朝礼で』
先月、8月上旬退院された患者さんの長女さんが、1週間後に病院に挨拶に見えました。他の病院で食事もとれず、点滴だけであと1週間の命と言われ、91歳で当院を訪れ、入院された患者さんでした。

以来7年余り、97歳まで元気で過ごされ、数え98歳で天寿を全うされました。いつも大きな声で、早口で話してましたね。

本人は娘さんに「こんなに広いゆったりとした所で過ごさせていただき幸せだわあ」といつもおっしゃっていたそうです。

娘さんは「母の97年の人生の最終章の7、8年間を素晴らしい環境で過ごさせていただき感謝の気持ちでいっぱいです」と涙ながらにおっしゃっていました。

本人の元気を支えてくれたのは、現場の皆さんの地道な業務のおかげです。この積み重ねがこのように評価され、感謝されていることを改めて感じました。3回の食事、2回のおやつ、オムツ交換、トイレ、入浴の介助、自宅では数日で悲鳴をあげそうな業務ですね。皆さんの努力に敬意を表し、また皆さんも自分たちの仕事に自信と誇りと喜びを持っていただきたいと思います。普段、院内での仕事に明け暮れていると、この病院の評価などは、よくわからず過ごしていますが、こんな時にがんばってよかったです。

初め、まだ残暑は続きますが体調管理に留意し、もうひとふんばり、がんばりましょう。

院長 田巻 國義

病院短信

2病棟 看護師長
渡辺 弘子

『食べる』ことが生きること』

私が担当する病棟（男女合わせて56名の患者さん）では『拒食』つまり食事を拒否してしまう方が数名いらっしゃいます。

この拒食、認知症の症状の一つである「失認（認知機能の低下によって、目の前にある物が食べ物なのか何なのか分からない）」が起ることに伴って、食べることを拒否してしまいます。そしてもう一つは「失行（今まで当たり前に出ていたことが出来なくなってしまう）」が原因で、食べ方（口に入れる、噛む、飲み込む）が分からなくなってしまう拒否をしてしまうという行為です。



どちらの人として、とても悲しい事です。当病棟では、ご自分で食事を摂取できる患者さんは3分の1程度で、その他の患者さんはスタッフが何らかの介助をしなければならぬのが現状です。前述の失認や失行だけでなく、手づかみで食べる人や食べこぼしの多い人、さらに嚥下機能の低下から誤嚥のリスク（誤嚥性肺炎）の高い人などなど。そんな例をいくつか挙げてみますね。

Aさんは、固形物が食べられず、椅子にゆっくり座ることもままなりませんので徘徊の連続です。従って徘徊の途中でデイルームに来たところを見計らって立ち止まってもらい、補助食品をあげて飲んでもらいます。でも、飲むことを嫌がったり、その1回量が少なかつたりすると、1日に何回となく摂取してもらおうを試みなければなりません。ですからAさんが起床してから夕食まで、スタッフのその行為は続きます。Bさんは、入院当初から全く何も口にしてくれ

ませんでした。ご家族から聞いた嗜好品をいろいろと試してみたり、冷たいアイスならと提供してみたりしましたが、見事に空振り、口から吐き出してしまいます。「何をあげたら食べてくれるのだろう」。私たちの試行錯誤が続いていますが、ある時、Bさんとコミュニケーション（2人でのお話です）している時に「おかし」と言ったのをきっかけに、おせんべい食を試みました。歌舞伎揚げはカロリーが高いけど食べにくいとか、ハッピーターンは5本食べると100キロカロリー摂取できるとか、はたまたまかっぱえびせんは止まらなくなり50本食べた、等々、いまだに試行錯誤の連続です。何をあげたら食べてくれるのか、私たちスタッフはこんな基本的な悩みを抱えながら看護介護を行っています。Cさんは、入所していた前施設から拒食があり、対応困難で当院に入院となりました。取り敢えずハーフ食（1食の半分量）を提供し、カロリーの足りない分は補助食品で補い、1日5食にして摂取してもらっています。早く3食に戻って欲しいのですが...

Dさんは、補助食品も嫌がっていましたがおやつのベビーカステラをパクパク食べたことをきっかけに、今では3食とも完食出来ています。こんなきっかけでも、もとの戻ることもあるのです。当院の栄養補助食品は、液状・ヨーグルト状・ムース状・ゼリー状と形態も種類も味も豊富で、患者さんにとっても飽きずに食べてもらえています。食事の介助をする私たちが、一番ホッとする部分でもあります。これからもそれぞれの患者さんの病状に合った食事を提供し、最後まで食べる支援を続けていきたいと思っています。



日常の一コマ



今月は1病棟の和子さんをご紹介します。和さんは埼玉県杉戸町ご出身で、若い頃からとても多趣味な方だったそうです。和・洋裁、編物をしたり、書道、園芸、折り紙なども楽しまれたそうです。性格はとても真面目で、少し心配性なところがあると娘さんは話されていました。

そんな和子さんも病には勝てず、認知症を患われて当院に入院されてから早や10年にもなります。この間、何回かの危機を乗り越えてこられ、現在はとてもお元気に過ごされています。いつもはとても穏やかなのですが、ただ、食事時になると、スタッフが「お食事ですよ」と言っても目をつむり、「嫌だ!」と言い、中々口を開けてくれません、時に大声で暴言を吐かれることもあります。

そんな和子さんも、娘さんが面会に来て「お母さん!」と声をかけてくれると目を開け、チラッと確認をし、娘さんだと分かると頑張って食べてくれます。

ここのところ当院では、このコロナ禍のために先月末迄ご家族との面会が出来ませんでした。従って和子さんも娘さんと会うことが叶いません。そこで私が時々「お母さん」と娘さんを真似て呼んでみると、チラッと私の顔を見て「違うな」と思いながらも目を開けてニコッと笑顔を見せてくれます。

以前と比べ、言葉数は少なくなっただけでも、「おいしい?」と声をかけると「おいしい」と返してくれた時などは、私も本当に嬉しくなります。

今月からは条件付きながら、面会も出来るようです。かけがえのない娘さんとゆっくり面会出来る日が、早く来るといいですね。そして和子さんがいっぱいニコツとしてくれるように、私たちはこれからも寄り添っていきたいと思っています。

1病棟 介護員 小沢 のり子

相談室

だより

『食べる』ことが生きること』

ホスピタルライフマネージャー

田中 ひとみ

コロナウイルスに翻弄され、不自由な行動制限から抜け出せずにいる私たち。そんな中でも当院の患者さんたちは、いつものスタイル?で、そしていつもの笑顔を私たちにも見せてくれています。

そんなコロナ下ですが入院の相談は絶えません。その相談ですが、最近は患者さんの年齢が高くなっているように思います。そしてその中でも特に「食べる」という事が、かなり難しくなっている患者さんが目立つようになりました。そう、『拒食』です。食べることを拒むことです。食べさせようとしても口を開けてくれない。口に入れても吐き出す。すぐにむせ返る。そして誤嚥性肺炎を繰り返す。などなど、ご自宅であれば、ご家族のご苦労は察するに余りある問題です。

この『拒食』に対して通常の病院であれば、すぐにも『経管栄養』を行うと思われそうですが、当院ではこの『経管栄養』をお勧めはしていません。何故ならば当院では『食べる』ことが生きることを原点としているからです。口を開けてくれない。開けても吐き出す。これも認知症患者の症状の一つなのです。

『拒食』の患者さんが増えれば増えるほど病棟スタッフは大変です。でも大変だからこそ、ご家族の痛みも解るのです。

しかしこの病院では看護・介護がどんなに大変でも、病棟の全スタッフはこの原点である『食べる』ことが生きることを頑なに守ります。何故ならばその原点が当院の理念の一つである『延命治療は行わない』に繋がっているからなのです。

人が年を重ね、生きることに支えが必要になった時は、医療よりは人としての思いやりや優しさだ、とこの病院では教わります。今後も入院相談の時やご面会の時に、ご家族の皆さんから受け取った思いは、しっかりと病棟スタッフに伝えたいと思っています。



いきいき

看護・介護

2病棟

介護福祉士

西田 正子

人が生きていく上で大切な事の一つとして「喜び」があります。

しかし、コロナが猛威をふるい、オリンピックは無観客になり、旅行や外食等も自粛せざるを得なくなりま

た。そんな中、患者さんの一番の喜びであるご家族との面会もままならず、院庭での秋祭りも中止になってしまいました。

秋祭りは、患者さんやご家族の皆様も楽しみにして下さる行事の一つなので、私たちが残念で仕方がありません。

患者さんに笑顔で過ごして頂く為には、どうしたら良いのか。毎日のレクリエーションを充実させ、毎月行われている誕生日会をより楽しい物にする。そう思い、皆でアイデアを出し合い、色々なゲームを考えたり、その道具を作ったりしました。

患者さんが寂しい思いをしない様、これからもスタッフ一同協力し合って笑顔あふれる病院にできたらと思っています。

